

道徳の理論 (1)

—道徳と身体—

大西 勝也

はじめに

道徳は、道徳意識としての道徳性と道徳的価値を含んでいる。道徳性は人間の主観的要素であるのに対して道徳的価値は客観的要素であるといえる。道徳性と道徳的価値は、人間の道徳的行為を通して、人間同士の間で、把握される。道徳的行為は人間の身体を通して現象化される。身体無くして人間は存在せず、また、道徳的行為も存在しない。当たり前すぎる話であるが、道徳がいかにして人間の生活の現象としてわれわれ人間の前に立ち現れる(表れうる)のかを理論的に考察することを基本とする筆者にとって、身体という視点は欠かせない。そこで本稿では、道徳が人間を通して、あるいは、人間の間でいかに現象化するのかを身体との関わりで考察してみる。

1. 道徳的価値の身体化

道徳には大きく、人間として生きるための規範とその規範を体現した行為という二つの意味がある。元々は、ギリシア語の「エトス」やラテン語の「モーレス」といった「住み慣れた場所」や「慣習・習俗」といった語義があるといわれるが、今日では、規範とそれに適った行為そのものが語義とされている。

そこで、規範の体現に着目してみる。規範は「道徳的価値」と置き換えることができる。規範の体現、つまり、道徳的価値に適った行為

は、規範や道徳的価値の身体化(受肉化)に他ならない。人間が生きているのは、身体の活動や行為を通して確認できるが、精神、人格、心といったみえないものは身体を通して具体的に知覚され、認識される。人格の元々の語義としての「ペルソナ」は「仮面」を指しているが、「仮面」とは身体の一部である。人間は時として自らの仮面にいろいろな表情を現象させるが、他者はそのいろいろな現象を通してその人間の人格の実相のいろいろな面を想像・認識(認知)し、それらを拾い上げて一つにつなぎ合わせて統合し、その人となり・人格を理解し語ろうとする。その理解を支えるのが記憶であり、とりわけその中から印象深く回想されるその人の似姿としてのイメージである。その似姿(イメージ)がどれほど一貫し続けるか、時の流れの内になかなる変容を遂げるのかは、想定しがたい。

2. 人格理解の手がかりとしての身体

その人となり、人格を理解する手がかり(入口)は仮面の表情だけではない。手がかりとなるのは身体すべてであり、とりわけ身体によって遂行される行為である。道徳の実践としての行為は、この人格の現われとしての身体行為である。それはその人の生から死までの歴史(生涯)の中で繰り広げられる。

こうした人格の現われとしての身体行為は、道徳のみならず、宗教の世界においてもみて取

れる。例えば、キリスト教にはそうした例の典型の一つがある。レオン・デュフル他の編集による「聖書思想事典」には「神」についての次のような記述がある。「神は、イエス・キリストにおいて決定的にあまずところなく自らを啓示する。・・・イエス・キリストの生活・死・復活のなかに、神はその最高の行為を成就したのであり、いまや人類全体が、彼を通して神に近づくことができる。・・・神は、人間にとって近づきたいものではなくなった・・・神は、キリスト自身のなかに、いまでかつてなかったほどの力と愛とを現し、そして彼を受け入れる者に自らを与えるのである。したがって、信仰をもってイエス・キリストに帰依すること、真の神を知ることとは同じである。」⁽¹⁾キリストがその人間としての身体でもって宗教的行為を行った生涯そのものが、神の人格を知る手がかりとなっている。ここで重要なのは、神の意志は「みえないもの」として人間に啓示されるのではなく、人間の身体を生きるキリストという「みえる」存在者を通して啓示されるということに他ならない。この「みえる」存在者の身体的行為を通して神の意志が理解される。これは、人間性の道德一般を考える上であまりに特殊な話ではあるが、しかし、人間が目にもみえない価値を人間という存在者の身体による行為を通して認識するということが、人間性の道德を考究する人間学のパースペクティブと同様に神学のパースペクティブでもなされているというのは興味深いところである。

3. 身体による道德性の表出

さて、話を元に戻すが、規範や道德的価値の身体化といっても、それは単なる身体の状態反射や生理運動というわけではなく、知識・理解、思考・判断、心情、意志といった精神的働きが総動員された道德意識の表出としての身体活動（行為）である。道德性とは道德意識であり、その内実は大きく善悪を判別する認識、善を志

向する心情、善を実現しようとする意志から成る。もう少し詳しくいうと、善悪を判別する認識についていえば、善悪に関わる（目的、手段、現実の状況についての）知識・理解や思考・判断が、善を志向する心情についていえば、善に快を感じ、悪を嫌悪する情操が、そして、善を実現しようとする意志についていえば、身体を活動させる根本の動因（行為の動因）としての意志の強固さが道德意識を構成している。そもそも、その人間が道德性を有していることは具体的にどのようにして他者に把握されるのであろうか。一つは動機（内心）レベルにおいて、もう一つはその現われとしての結果（しかし、結果はとりあえずの結果であり、どの時点からどの時点までの行為をひとまとまりでみるかにより、結果内容は異なってくる。人生は死ぬまで数えきれない取りあえずの結果の繰り返しともいえる）レベルにおいてである。

しかし、自己理解はともかくとして、動機は本人が表明しない限り、他者にはわからない。動機がどのようなものかは、他者が、その人の身体を通しての行為のプロセスと結果をみて総合的に判断することにより、その人がいかにどの道德性をもちあわせているか外面から内面を推し量るのである。推し量る、つまり、推理には、実のところ、想像や直観が重要な働きをしているのであるが、それについては、後ほど触れることにしたい。

4. 道德性を理解する手がかりとしての身体、ことば、および、作品・成果

外面から内面を推し量るとはどういうことか。外面とは身体を通して表出されたもの・現象である。まなざしをはじめとする表情、しぐさ、態度、動作、口調、活動、表現等々、そして、内面を推し量る最大のがかりが自己表現（表明）として発せられることばである。

大きくいうなら、外面とは「身体活動」と「より内面に直結した外面としてのことば」から成

る。遂行される仕事や活動にはたいていこの二つが含まれる。文字だと書くという身体活動によりことばが記述され、仕事の成果としての作品が完成し、そこには書き手の内面が何らかの形で表出されている。身体活動とことば、そして、生み出されたものをそのまま素直に理解する場合に、そこに屈折した、つまり、表出された外面的なものと同様の内面のずれ、もしくは、外面的なもの背後に、一見しただけではわかりにくい内面を読み解くこともあり得る。二国間で、二人の政治家がニコニコ握手して友好的なイメージを外面的に表出したからといって、また、友好的な言辞を交したからといって、額面通りには受け取れないこともある。(逆に、その外面的表出を両者の心を読み解く材料として捉えることもある。)

そこで、それを取り巻く状況や文脈、そして、それに関する多様な知識・情報を考慮しながら、身体が表出する二つと、それらを総合した内面を読み解く解釈がいろいろと立ち現れる。残念ながら、良心的にみえるふりをして(偽装して)、他者を欺くことはしばしば人間によって行われる。それは故意によるものだが、動機においてそのつもりはなくても諸事情により結果的に欺くこと起こる(「意図せざる結果」) (とりわけ、ことばと身体とのずれ・矛盾は注目される場所である)。ともあれ、様々な解釈を呼び起こしうるといっても、人間の身体からの二つの表出と、そこから創作・表現・仕事・遊びとして産出された作品や成果の内実は、その人間の道徳性を垣間みる窓口である。道徳性がみただ目通りに表出されているとしたら、具体的にどのようなものか、いくつかケースを挙げてみる。

高齢者が転倒したとき、抱き起し、落とし物を拾い、大丈夫かどうかやさしくことばをかけるケース。電車に乗るとき、整列乗車というルールを守り、車内で他人迷惑をかけないようにしているケース。いじめている子たちからいじめられている子を引き離し、いじめている子

たちに鋭い視線で強い口調で「見苦しいことはやめろ」と叱責し、気迫でねじ伏せるケース。

逆に、非道徳性が表出しているのがみてとれるケースを挙げてみる。教師の言うことに従わず、教師に罵声を浴びせ、その胸倉をつかみ、暴力をふるうケース。言行不一致で生徒の信頼を失うケース。SNSで特定の子を誹謗中傷して追い詰めてしまうケース。

道徳性・非道徳性のどちらの表出のケースにおいてもことばの占める位置が大きいように思われる。

5. ことばの力

いじめが原因で自分の子が自殺した父親が「人を生かすのもことば、人を殺すのもことば」という話をしてきた(2016年9月3日放映TBS「報道特集」)。コーチのことばで力づけられるアスリート。意識不明の状態が続く中、治療を受けながらも、身内の人にその身体に触れられ(ことばで)語りかけられることを繰り返したのちに、奇跡的に意識を回復する患者。幼少期に親から聞いた「人がみていなくても、お天道様がみておられる。悪いことをすると必ず自分に返ってくる」ということばが、一生、耳に残り、悪の誘惑に負けない人。

これらの例には、ことばの力が人間にとって決定的であることを物語っている。

6. しぐさ

近年、「江戸しぐさ」が道徳の教材としてクローズアップされた。その真偽はともかくとして、「江戸しぐさ」として呈示されるいくつかの例には、人間の他者への気遣いが身体を通して表出されている様子、つまり、マナーの様子が描かれていることは理解できる(「かさかしげ」、「こぶしうかせ」、「会釈のまなざし」、「つかの間の付き合い」、「肩引き」等々)⁽²⁾。ここでは、あいさつや差しさわりのない話題による

ことばのやりとりも大切だが、ことば以外での相手へのやさしい気遣いの身体を通しての表出の方がより注目されている。

ただし、その後、この「江戸しぐさ」が歴史的眞実に基づくものかどうかという疑問が呈され、それを道徳教育の教材とすることへの問題提起がなされた⁽³⁾。眞偽に係る事案であるからして、その扱いは慎重であるべきであろう。

こうしたことから、「江戸しぐさ」を人間のしぐさを道徳性の表出・体現の例として取り上げることは今の段階では控えるのが適当であるが、我々が日常の生活経験から道徳性の表出の一つの形態としてのしぐさの例を記憶にとどめているという事実は拾い上げてよいであろう。

7. 徳

ところで、教育とは何を指し、道徳との関連でいうとそれはどのような目的に収斂されるのであろうか。思うに、近代以降、人格形成(品性の陶冶)としての徳育をその本質とする「教育(Erziehung)」と、知育を中心とする「教授(Unterricht)」の統合が人格形成の優位の下に統合することが、教育によって目指されている。J.F.ヘルバルト(1776～1841)の教育思想にはそのことがみてとれる(「一般教育学」)⁽⁴⁾。

しかし、この統合の発想の端緒は、すでに、古代の哲学者アリストテレスの思想にみてとれる。アリストテレスは、その著「ニコマコス倫理学」の中で次のように述べている。「かくして卓越性(徳)には二通りが区別され、「知性的卓越性」・「知性的徳」(ディアノエティケー・アレテー)と「倫理的卓越性」・「倫理的徳」(エーティケー・アレテー)とがすなわちそれであるが、知性的卓越性はその発生をも成長をも大部分教示に負うものであり、まさしくこのゆえに経験と歳月とを要するのである。これに対して、倫理的卓越性は習慣づけに基づいて生ずる。「習慣」「習慣づけ」(エトス)という言葉から少し

く軟化した倫理的(エーティケー=エートス的)という名称を得ている所以である。」⁽⁵⁾。ここで「徳」という概念が使用されているが、徳とは何なのか。アリストテレスによれば、「徳は情念でもなく能力でもないならば、残るところ、徳とは「状態」であるほかない」のである。続けて、アリストテレスは問いかける。「徳(アレテー)とは「状態(ヘクシス)」である、というだけではなくして、それが、いかなる性質の「状態」であるか」と⁽⁶⁾。すると、その問いには、次のように答える。「人間の「アレテー」とは、ひとをしてよき人間たらしめるような、すなわち、ひとをしてその独自の「機能」をよく展開せしめるであろうような、そうした「状態」でなくてはならない」⁽⁷⁾。

以上から、人間の卓越した状態としての徳には知性的徳と倫理的徳の二つがあり、前者が教示により、後者が習慣づけから生じる、というのがアリストテレスの考え方であるが、この二つの徳は人間にとって不可欠なものであるだけでなく、知育(教授)と徳育(教育)の統合をめざす近代以降の教育においてもその実現が目指されている。

確かに、道徳が人間を通して現象化する上で、人間形成過程における知育と徳育は決定的要因ではある。しかし、道徳が人間を通して現象化するということは、人間による道徳の体現であるならば、どのように道徳が身体化されるのかということをも人間学的に把握しておくことも必要に思われる。というのも、いうまでもなく、道徳の身体化という日常生活における現象についての考究は、知育や徳育を考える上での前提であり、また、余剰でもあるからである。というわけで、小論の本題に戻ることにしよう。

8. 道徳性の身体化の前提

人間が人間として道徳性を体現するためには前提がある。身体と意識が生きていて、主体

的に知性・感情・意志を身体の自己コントロールの内に働かせ、随意的に行為を選択できる自由を有するという前提である。そして、もう一つ前提がある。それは、他者と共存しながら自己を生きる生への意志があるという前提である。生まれたての赤ん坊に道徳性を求めることはない。また、意識不明の病人に道徳性を求めることもしない。さらには、認知症の人に道徳性を求めることもしない。なぜか。先の前提がクリアできない人間についてのケースだからである。意識と身体の働きは生存の基盤であり、まずこれなくして道徳性どころか、人間の生の営みは成立しない。これらの働きの健康な保持には、人間が生存できる自然的環境や生命の危機がなく、自由が認められる平和な社会的環境、心身の発達と健康を支える文化・文明的環境がまず必要である。個々の人間はこうした環境の中で主体的に知性・感情・意志を身体の自己コントロールの内に働かせ、他者との共存を図りながら行為を選択していける。それは、自由人、自律した人間として生活することであり、現代人の目指すところである。

しかし、現実にはいろいろな事情により至る所に困難な状況が横たわっている。認知症故に感情のコントロールができず、安らかな気持ちをもてず、他者につらく当たる老人。自分の感情をコントロールできず、すぐキレて、他者を傷つけたり、困らせたりする子ども。

9. 生命のぬくもりに満ちた身体との出会い

自分の感情をコントロールできず、他者につらく当たる老人に関わる例として、「セラピードッグ」の話がテレビ番組で紹介されたことがあった⁽⁸⁾。そこでは、認知症の老人がいらいらするとその感情をコントロールできず、怒鳴ったりして、周囲の人々に迷惑をかけることがしばしばみられる。そこに、一匹のセラピードッグが現れる。その老人はセラピードッグと

スキンシップをすると、優しい表情に変わり、「かわいい」と人間らしい安らかな感情を吐露する。セラピードッグは、訓練された犬で、人間に対して従順で愛くるしい表情をしている。ことばを発しないが、というか、ことばを発しない故に、その身体を通してシンプルに表出されてくる人間への信頼が人間に強烈な印象を与える。

生き物の生命のぬくもりが直接のスキンシップを通して人間に伝わるものと思う。それに対して人間も信頼でもって応えようとする。その信頼関係で生じる心の平安が人間の感情を落ち着かせる。この認知症の老人にみてとれる心の平安の状態をみたとき、それが老人の中で感情のコントロールがなされている状態の証になるといえるのかどうかは、にわかには判定しがたいところがある。しかし、自律の大事な要件の一つとしての感情がコントロールされた状態に近い現象が生じていることはうかがえる。このセラピードッグの話は、信頼できる生命のぬくもりに満ちた身体との出会いが人間の自律に不可欠な心の平安をもたらすという一つの例示である。

また、この番組では、身体の半分が不随の老人が、セラピードッグを撫でたくて思わず動かせないはずの手を動かすシーンがある。(ただし、こうした事例から、同種のケースにすべてセラピードッグが効果をもたらすというふうを考えるわけにはいかないであろう。)

10. 感情のコントロール

さて、後者の、自己の感情をコントロールできず、キレやすい子どもに対する教育のプログラムとして「セカンド・ステップ」がある。「セカンド・ステップ」は、1980年代、校内暴力やいじめが社会問題化されたアメリカで開発されたプログラムで、子どもが暴力の被害者および加害者になることを防ぐことを目的としている。「ファースト・ステップ」では、暴力の被

害に遭わない方法を身につけることを目指し、「セカンド・ステップ」では、他人に暴力を振るわない方法を身につけることを目指す⁽⁹⁾。

すぐ切れて暴力を振るうことがないようにキレない子を育てることを目指す「セカンド・ステップ」では、次の3つのことがトレーニングされる。

- ① 怒りの感情を抑える。(自己コントロール)
- ② 相手の立場を考える。相手の感情・思いを考える。(自己と他者への理解)
- ③ 相手と課題を解決する。(自己と他者との共働)

この根底にあるのが、ありのままの自己・他者に向き合い、受け止めることである。上述の3つを別様にいうと、以下ようになる。

- ① “怒り”を自覚してコントロールする。
- ② お互いに自分の気持ちを伝える。
- ③ 問題を解決する方法を考える。

①の怒りをコントロールし、抑える具体的方法として、次の(ア)、(イ)、(ウ)の3つが挙げられる。

- (ア) 3回呼吸をする。
- (イ) ゆっくり5まで数える。
- (ウ) 自分自身に「落ちついて」と言い聞かせる。

この自己によるコントロールでは、ことばは最小限、単純化された自分への言い聞かせしかない。それにより身体が落ち着いたところで、つまりは、心が平安になったところで自分と相手(他者)の気持ち・立場を考え、双方での問題解決のための考えを展開するということになる。考えが展開される段階では、言葉を交わしながら考えが深まる。

つまり、ことばがいきなり内面の中で飛び交うのではなく、外面的に相手にたくさん発せられ、様々な思考が同時に展開するのでもない。①の(ア)、(イ)、(ウ)の定式化された最小限のことば(自分への言い聞かせ)が、自己の身体コントロールを呼び起こす。自分への言い聞かせとしてのことばは自分の意識(心)の志向

性であり、それにより身体のコントロールを体験できたとき、心と身体は一つになっている。心と身体の一体化ができたところで、次に、②と③の定式化されたことばが、自分への言い聞かせとして、意識(心)の中で発せられ、相手(他者)の立場・気持ちを考え、気持ちを伝えあい、問題解決の方法を相手と考えるという②と③のことばの身体化(行為化、現実化)が目指される。

11. 結論

道徳、道徳性、道徳的価値の身体化こそが、人間における道徳、道徳性、道徳的価値の表出に他ならない。それは、大きく、身体活動そのものと身体から発する「ことば」から成る。

しかし、身体を自己コントロールし、知・情・意を主体的に働かせることができるという意味での自律なくして、道徳性の身体化、つまり、道徳的行為は成立しない。感情のコントロールはそうした自律の一例といえる。そこで、身体という視点から人間をみたとき、自律はいかにして成立しうるのかということを探求することが今後の課題となる。

(続く)

[注]

- (1) X.レオン・デュフル編 (Z.イエール 翻訳編集)「聖書思想事典」165頁、1983年、三省堂
- (2) 越川禮子「図説 暮らしとときたりが見えてくる江戸しぐさ」、2007年、青春出版社
越川禮子「暮らしうるおう江戸しぐさ」、2007年、朝日出版社

- (3) 原田実 「江戸しぐさの正体 教育をむしばむ偽りの伝統」, 2014年, 星海社新書
- (4) ヘルバルトは「強固な道徳的品性」の形成を目指した道徳的陶冶を教育目的と捉える。「品性」とは「意志の形態」を指している。道徳的品性の形成は道徳的意志の形成と同義となる。そして、ヘルバルトによれば、道徳的意志に直接的に作用するのは「訓練」であるが、意志は「思想界」を根拠としている以上、「思想界」の陶冶としての「教授」は意志、つまりは、品性の形成に根本的に関わるということになり、結果、徳育をその本質とする「教育」と知育を中心とする「教授」の統合が教育の内実となる。
ヘルバルト (三枝孝弘 訳) 「一般教育学」, 1976年, 明治図書
- (5) アリストテレス (高田三郎 訳) 「ニコマコス倫理学」(上) 55頁, 1981年, 岩波書店
- (6) 前掲書 68頁
- (7) 前掲書 69頁
- (8) 日本テレビ 「セラピードッグ」(報道番組「バンキシャ」), 2009年9月13日放映
- (9) TBS 「感情を教える」(報道番組「ニュースの森」), 2004年9月2日放映